



鞍馬大狗

手紙
是の鞍馬の奥僧より各々伝へて
客僧よりいづれ一山をた見こ
る所ありとも山をた見こる
は山をた見こるなりと云
ふことありや御音信にあり
たりと一筆啓上しめし古事なり

韓子孫

大悲心咒

牛看サレ

二、
一、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

牛春子言

その半日の客。月夜の一夜。

都ぞれさうへんをあら

い
ち
や
ら
か
ら
く
た
ら
は
る

思以爲金夏史記音子子子

ね
も
山
う
ろ
し
や
市
訪
ひ
て
る
ろ
う
さ
ふ

誰か云ふ

立門子人

誰よりいふ人より高次の

松
 山
 の
 却
 爲
 乃
 九
 把
 笑

の
檀
多
全
と
名
も
一
手
意

癰疽之毒

梅子のうらなひの
秋の夜は長し

那王殿より
 来りてふりて
 入る人あり
 在余前の散
 松尾の跡に
 雨乞あり
 衣袂雲より
 吹く風あり
 事や
 山望あり
 名高
 金鐘

山道の邊より
 来りてふりて
 入る人あり
 在余前の散
 松尾の跡に
 雨乞あり
 衣袂雲より
 吹く風あり
 事や
 山望あり
 名高
 金鐘

朝日集卷之四

古野祝のる前

もあふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

牛若

五

古野祝のる前

もあふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

あふりふり

牛若

半

あふりふり

あふりふり

あふりふり

新天孫

暖老白病の長刀

大天魔

神の山

山桜

やうき

早稲

鞍馬の奥僧

谷口大天

あつた

天狗

ふく

豊前房

白雲の相摸坊

大山

飯細の三郎

富太郎

高天

比良

女

相模

た

山

僧

谷

僧

谷

僧

谷

僧

谷

僧

谷

醫心方卷之六

ちひさしや
働^{ニテ}入^ル
るは改^メ那^ニ日^ニ展^キ唯^ニ

飛術
へりやう
極牛
くごく

世に廣く之を好む者あり

卷之四

誠子孫氏乃頭領也

唐子黃例有錢下

高祖の長子

者。黃石公馬よりて行遠

其番と

てちよといふ所まで

く、
成
背
と
取
く
も
う
ひ
度
を

戦国集

左右と一肩の者もたかひく

まひつゝも人事を待ちきり

をきり及指を追取指して長良

指を指し馬の上にあはるる

もくもきり心け共法の奥

系を待ていふ共く和上隔

もくもきり心け共法の奥

みく安もふるもあつ天狗を

心や方主を待賞龍のちるも大

事とゆきみちへく子家とふ

まくとりしやうやなまの心

くやあし太コ打杵氏略乃ちあれの通

く太コ平藤橘は家うもり

根家の水上の信和天皇は後乱

鞍馬鞍馬

九

ふてあうく時をうけ
あふは驕ゆる子家と西海に追
る遠波蒼波の浮雲
飛り自在とく敵をた
る會戦ともくはた
る是れあやうや清い
海より牛若はまとうま
と

又立海うまを有西海に
の合戦といふもけち
まはる矢のちとそ
るたれやうの免と
うたのなたのめと
かきうなるはまを
あはれ

乾香

千終

Handwritten text in Arabic script, likely a manuscript or a page from a book. The text is written in a cursive style and is arranged in several lines. The paper appears aged and slightly discolored.

松山

羊僧
木
心

風を待たせどく松あり
急ぐ人
是の境の奥に候

所と西行法師より授け新院
 本院位と誦ひ給ひ新院より
 寺務給ふより讀改出松山とあり
 流されざる自願あり崩御あり

ちこみ 崩御ありと終ひたりと
承て依りて跡吊ひ下りて為豊臣
よりてい松山の御廟前より入て
終りて 楓天下よりぬれ西行
上人より何れもあきまへし
なる大山よりぬれや九山あり
まうあひるなる社新院乃

御廟前松山より入て僧あり
さしに僧とありてあり
もちりぬ人よりぬれや
くし情有言の心あり
きりふもぬれあり
ちひ谷戸よりぬれあり
の音より妻に松山よりぬれあり

休む 然る 新院の 神廟

所松山より ありて 諸國 敷有

様より ありて 新院

所 後より ありて 首の玉樓 全

殿の 中 住居 百官 神より 寵れ ありて

ト ありて 田舎 毒の 下人 ありて

ありて 廟 ありて ありて ありて

ありて ありて ありて ありて

敷き 所有 様 用 ありて ありて

ありて 君 ありて ありて ありて

ありて ありて ありて ありて

乃 け ありて ありて ありて

ありて ありて ありて ありて

ありて ありて ありて ありて

ありて

雲の如く老の波に身をまかせ
さきうやひなききりあふまじ
咲花とふく人そあはるるな
鶯の声はもめり長と唄ひ
まの夕ふいへ尉尉君の命
朽ちたるもの有りあつて
やうていふ君所は命のわき

の事と思ふにけしき
あまの魔縁の者皆西付ちり
の白峯に相模坊はあつて天狗
まうろうおふのまれのあつ
うまや老人も常しき本陰を
清のけを慰めたりあつても
西門唯今に詠子の言を心所り

西行 是 反 還 可 有 了 乎
 面 白 老 疾 也
 又 立 於 老 疾
 立 寄 五 言
 平 旦 牙
 夜 月

うるむも娘も又唯今に詠哥
 の言葉。肝は銘して面白きこと
 姿と取さへと。心もあはれに下
 頰は鳴動して玉狎。現まはる
 誠は妙あり玉狎のく。花はあは
 花はあはれ玉狎のく。花はあは
 乃奔樂。面白きこと。乃奔樂。

時をくくはてはとるに
舞あうひ給へ又古へも
ふと思ふ山は舞のほ
ともしく怖くや驚あま
るや白掌のく山あ
かあり稲妻頻ふく雨
らて雲雨より天狗の姿
ハ服きたる

是ハ白掌ふくして手
をかくあり相も新院思
松山より崩御あり常
はあそと慰めやう天狗
つまきと並へおく松山
はあそと慰めやう天狗
ちり就叙し金鼓を
あそと慰めやう天狗

意を慰めたり也（勸）其時君を悦び
たゞはくは威の市言なり
あま天狗も首を地へ付け
り是は成て天狗とす
虚空よりわきまを明く
白雲の梢よりひ翔つ也
こけり

車僧

反り世りく車僧く旅の
かたはるはるを倉等
力強くちや湯野の
龍の響き声へて
井の底のうら
白妙なる日

西山平らなるきりくさる野の

あふりし車と立方へまきと

あふりし車と立方へまきと

あふりし車と立方へまきと

あふりし車と立方へまきと

あふりし車と立方へまきと

あふりし車と立方へまきと

あふりし車と立方へまきと

あふりし車と立方へまきと

あふりし車と立方へまきと

あふりし車と立方へまきと

あふりし車と立方へまきと

あふりし車と立方へまきと

あふりし車と立方へまきと

あふりし車と立方へまきと

あふりし車と立方へまきと

[illegible]

車僧の大分三界無安好如火也
 出づるなり車僧の下なり
 直元なる道ありきなり
 己ヤく足す人心をなす雲水切
 ありそも凄しく笑なり
 くらゐを客山等より世に

あひて車路ありきわづらふ
わづらふあひて山太郎坊より室へ
や入あまや車僧やよりて
山の黒雲よりてあり
くあ
ほしやうし
一ヤイヌ愛宕山密原より
空よりた摘人き跡たもあ
うき中は山路あり板車輪あり

車僧ト車僧ト云利ト云とト云きト云くト云をト云入ト云あト云くト云をト云

ちト云ちト云のト云うト云くト云あト云とト云あト云くト云わト云

然ト云るト云くト云はト云ちト云やト云はト云欲ト云ちト云にト云いト云くト云

うト云うト云車僧ト云魔ト云道ト云もト云心ト云をト云

よト云車僧ト云善ト云惡ト云をト云うト云くト云ハト云兩輪ト云乃ト云

佛ト云はト云あト云まト云りト云世ト云にト云はト云るト云

火ト云惱ト云あト云まト云りト云苦ト云提ト云有ト云いト云あト云くト云

元ト云生ト云をト云るト云車僧ト云あト云まト云りト云おト云郎ト云坊ト云乃ト云

くト云行ト云者ト云をト云有ト云初ト云めト云及ト云終ト云にト云一ト云

行ト云及ト云行ト云德ト云をト云とト云くト云まト云りト云こト云くト云

いト云車僧ト云行ト云をト云くト云くト云いト云くト云にト云女ト云

るト云たト云らト云るト云もト云そト云れト云まト云るト云もト云

そト云れト云はト云ちト云うト云くト云不ト云増ト云不ト云減ト云

面ト云向ト云のト云時ト云をト云刻ト云にト云入ト云面ト云

白州時きあゝ雪中よりぬを
めもくして浪津野の原までい
あふもしあそくもくうと
ゆめを心よりいひぬちやあを
かたひそあふきこしをわ
て車よりあそく車よりあ
行かぬ牛よりいといへや

あそく車よりあそく牛よりいといへ
あそく牛よりいといへやあそく牛
の道よりいといへやあそく牛
あそく牛よりいといへやあそく牛
あそく牛よりいといへやあそく牛
あそく牛よりいといへやあそく牛
あそく牛よりいといへやあそく牛
あそく牛よりいといへやあそく牛

拂子とあきく虚を打む
主ふ北車く
今心定る車をふつり
そあく人えひる
屋うてる車こそ成る
お小車山をうり
ワの道野鳥のうて

財の利益あるとや
浮世の喧嘩あれ
少く車わつら
わもり
はる車路
北恩の
て成り

法カカで
 一の山河
 物の車僧
 万のや
 狗の谷掌
 一て
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

久代の教
 教の教
 花嚴阿
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十

川音
 鷺の山とて
 あらう鳥とて
 常樂と音信
 山はく
 月へ虚眞の灯より

けい、空廊の帯とあり、石
 上、塵あり、滑あり、苔路とあり、よ
 ろへのえ、わく心もこ、けき、きわな
 うふけ内、案内、さう
 窓、ふひ心ととも、み、町、み、案内、申、さ
 ず、い、い、あ、る、者、る
 ち、い、わ、ぬ、客、儒、あ、る、さ、う、も、れ、す

才なるものなりと云々
助るるなりと有難し
又まうたり
そのことなり
おふ院なり
定てあり
なり
報し

かゝる我々神道なり
何事なりと云々
り
去るる世のなり
釋迦教
る
人

あやめくもろきになけり
 思ふさるる空そ秋なめり
 しづかにひとあはれまゝと
 くち物語しづかにあはれ
 見えたる松一本のまゝ
 ときどき寺の鐘の音
 ある時と眼をひらいて
 能く

遠くへさうりとおき
 うる雨の音
 子う通のふれ
 梢のまろ
 子あま
 つら
 ち

山あり 大地あり
 佛の御声新に支や两眼をひき
 きあるふとふまは 山の則に
 本又七宝寶樹とゆへ 釋迦
 如来獅子の座に坐せ給へる音賢

文殊左右に居て喜菩薩の座に
 處る砂の上の龍神八部の
 のくお 園遊する 妙樂河
 難の大聖文く二面はさるるを
 うち四種の光輝ありて天人雲々
 つくみある音樂もさうに
 ありしちんは文を現現する

きんじつ 僧正 此時 怒み 信を
おし 怒み 涙眼 みる 心 合
掌 一 今 頂禮 大恩 教王 釋迦 如来
と 懼 敬 禮 拝 せ び 祈 げ 大 願 響 震
動 帝 釋 天 等 あり び 一 心 入 妙
より 天 杓 古 び 怒 ぎ あり けり
す び 又 刹 那 一 回 なる 見 成 けり
太切

太史三振るるい
早稲三三

帝釋 怒み けり 子 魔 術 あり ぬ あり せ
る 大 會 散 る 成 けり けり けり
帝 釋 其 時 怒み けり 信
怒み あり 怒み あり 怒み あり
昔 怒み あり 怒み あり 怒み あり
怒み あり 怒み あり 怒み あり
怒み あり 怒み あり 怒み あり
怒み あり 怒み あり 怒み あり

帝釋則雲路をこぎてあかき雲を
具時不指いふれとていふりてそ
る、若根とていふりてそとみ
て、深谷の巖洞へ入るもさ

舟橋

山路をこぎてかけつゝ所もあ
る、袂のあはれ、是を幸ふ三徳野乃
おほく、我は程の徳より洛陽
の寺に残りて、拜廻るゝ是
より、東國のりともさへ、
せしう、乃ていふりて、彼寺の

侍トどト小ト一ト夜トをトかトのト夢トのトさトめトにトお
 のトこトをトるト伊ト吹トたトしトりトあトのト月ト
 れトとトしト屋トこトのトあトうトたトとトまトのト
 つト非トくトコトストいトよトれトたトそトとトけトれト
 西ト橋トをトはトのトせトうトとトきトのトさトうトあト
 日トしト食トらトまトうトとトてト何トもトいト
 こトのトあトいトきトうトとトきト橋トあトあトひトをト

ヒテサシ

つトうトかトきトほトあトうトのトりトのトさトめト
 いトよトうトりトいトめトあトいトあトのトさトめト
 世トふトるト六トのトるトのトわトのト橋トあトいトあト
 橋トしトいトあトとトちトしトのト橋トあトいトあト
 ちトいトちトあトいトあトのトせトうトひトのトさト
 ちトあトいトあトいトあトうトけトいトあトいトあト
 のトさトめトのトさトめトのトさトめトのトさトめト

わが河を渡る心

十の道は誠の橋と云ふ

いふ是あらずと尋ね

わが心も橋のひまは

くもあらずと見え

神の心も橋のひまは

いふ東海なる心

しと偽りその心

いふ心も橋のひまは

わが心も橋のひまは

いふ心も橋のひまは

いふ心も橋のひまは

いふ心も橋のひまは

東海なる心

しりぞく物なり。おとし

乙未
永壽のまをきく
うの爲り

こと文是光山伏の標を以てして

其
子
入
一
三
伏
乃
牙
亦
竟
定
之
取

ふ、楊、を、ひ、き、り、ち、の、あ、り、

うに
あに
そよ
便の
み
う
ま

や新し久米路の橋をいふ

きふふも我をの

一少やむしや果度る

豊橋乃^{とよはし}あ^あと^とさ^さけ^けな^なら^らぬ

金所
開
行

やぶる作れあふ名橋あふいさし

是をうき云

の、日、乃、ハ、と、は、氷、の、舟、棹、乃、い、て、

橋しんをばくばく
とてはくばく

おちんちんをばくばく
とてはくばく

小袖おちんちんをばくばく
とてはくばく

魚のびしをばくばく
とてはくばく

せき橋のびしをばくばく
とてはくばく

おちんちんをばくばく
とてはくばく

おちんちんをばくばく
とてはくばく

おちんちんをばくばく
とてはくばく

おちんちんをばくばく
とてはくばく

おちんちんをばくばく
とてはくばく

おちんちんをばくばく
とてはくばく

おちんちんをばくばく
とてはくばく

おちんちんをばくばく
とてはくばく

といひはけ板とれ放いふと事
 とあてて掛てぬう橋より
 二と居てやう成事いひ国果
 といふのも云運よと居て
 運大紅運の休小とらるる
 うとあきおしこの海とあ
 け橋をとしやうふと居る
 言と

変れさうとあてて
 力をやと変れこの思とあてて
 と意字のここととけと意も乃因
 母これけ舟橋の古き物とて
 牙の上あて板とてきい
 又日断とてやとあてて
 くらと意とて中とて

付分たしむるを中絶て家は
正敷と信つ。まづ舟橋島にきてか
ねこそとけけたるものなり。され
小成よりく。うに跡をあ
きめく。三寶の持たぬなり。よ
障乃罪を消ぬ。すいなり。力う
紙きく。ツリ
タコイ
に有る。や。は。三途

小成の。し。あ。れ。も。は。の。力。う。舟
う。よ。と。成。る。難。し。我。を。又。
妄。執。乃。故。屋。し。う。い。の。者。を。も。
粗。乃。し。き。く。し。と。る。や。う。し。あ
中。雨。と。し。う。し。う。河。水。ま。う。ち
を。め。り。う。し。う。か。る。や。う。の。あ。げ
乃。し。を。し。く。し。く。し。の。あ。げ

お色くしきまへ海間一や見我

者多教善提のうきとくひく上

ちくあくれ度志くふとち

しふ 我心者即ち成佛の勢也

うきやあ幽玄あくまをばうやも

執りうきと成佛の縁と成る

事もしりんけふ罪の雲清くも

み乃月もあけぬし又障のふも入

れやある雲の取れ一時こそあ

乃ちもふきふいくも極を

んしうや吉野のふも孫と足

もいもの中あうたのよきあ

あうきとくいり自るこのあ毎子

かよあれは其子あふあう

毒 丹 十 七 子

ト下

卷一

しちゝ

牛

卷之

三

卷之六

三

の

取世

下

百

三

子

もく 雲龍のまゝきふりて
生死のまゝのまゝ 神皇のまゝ
まのく我とまのまゝのまゝ
を行者の法味よりまゝのまゝ
心玉階よりまゝのまゝのまゝ
まのく

下係之音曲先年百番雖令
板門也 龍謡教番因有脱落之
近厥亦今亦後百番令用板者也
章句 声付 不順疎意所可有
付之學士有效受 南都位改止之

貞享三曆

丙寅

京都

吉田徳興 満正

霜月者目

江戸 次原辰雄 春

